

# NEWS LETTER

教育開発支援

November 2022  
No. 45

令和4年度 GPS-Academicの分析結果について.....	01~05
	教育開発支援委員会・教務課IR担当
令和3年度 卒業生アンケートの結果について.....	06~08
	教育開発支援委員会・教務課IR担当

## 令和4年度 GPS - Academic の分析結果について

教育開発支援委員会・教務課IR担当

### 1. 今年度の受検状況

GPS-Academicは、かつて実施していた「大学生基礎力レポート I・II」から切り替えて今年で4回目の実施となる。本年度の受検状況については1年次および2年次の受検率が大幅に低下した。

### 2. 分析のポイント

GPS-Academicの概要については、本誌第39号に掲載しているため、そちらを参照いただくこととし（専修大学HPトップ／

学生生活／授業・履修情報／教育開発支援 NEWSLETTER）、教育開発支援委員会および教務課IR担当者では、今年度における分析ポイントを以下の2点に絞ることとした。

- (1) 卒業認定・学位授与の方針の検証
- (2) パネルデータを用いた学修成果の検証

「(1) 卒業認定・学位授与の方針の検証」は、前年度以前から取り組んでいるものであり、継続して分析・検証することが重要であるため、本年度に関しても同様の分析を行った。次に、「(2) パネルデータを用いた学修成果の検証」では、4年間で収集できた

表 1 GPS-Academicの受検状況

	2019年度	2020年度	2021年度	2022年度
	受検者数 (受検率)			
1年次	2951 (76.5%)	3487 (80.0%)	3044 (72.9%)	2492 (54.8%)
2年次	1358 (33.9%)	290 (7.5%)	1945 (46.5%)	1087 (26.1%)
3年次	1160 (28.3%)	138 (3.5%)	988 (26.0%)	979 (23.9%)
4年次以上	548 (11.4%)	64 (1.3%)	145 (3.3%)	204 (4.8%)

GPS-Academicの結果をパネルデータ化し、どのような効果がみられるか検証した。

### (1) 卒業認定・学位授与の方針の検証

本学では、学士課程全体の卒業認定・学位授与の方針（以下、「DP」という）において、次の4つの項目を身につけなければならない資質・能力として掲げ、各学部・学科では、これを踏まえてそれぞれのDPを策定している。

- [DP1] 社会知性の核となる、専門的および一般的な知識を体系的に理解し、それらを説明することができる。（知識・理解）
- [DP2] 言語運用能力、情報・データリテラシーを身につけ、それらを活用することができる。（汎用的技能）
- [DP3] 知識体系を基盤とした思考方法を用いて、地球的視野から創造的に社会の諸課題に取り組むことができる。（知識体系に基づく思考と知の創出）

[DP4] 「社会知性」の意義を理解した上で、人間理解、倫理観を基礎にして、社会生活上の諸課題の解決に取り組んでいける能力を更新し続けることができる。（態度・志向性）

以下ではまず、これらのDPの学生認知度について確認し、次いで成長実感の自己評価項目の集計結果を示す。

#### (i) DPの認知度

DPは、大学のホームページに掲載するとともに、2018年度からは各学部・学科のDPを学修ガイドブックにも掲載している。

DPの認知度については、大学独自設問として例年以下の質問項目を設定している。学部によって多少の違いはあるものの、「内容を知っている」、「説明を聞いたことがある」を回答した学生がほとんどの学部・学年で50%以上であり、昨年度までと同様の傾向である。DPを策定して数年が経過し、年々、学生の中の認知度も向上していたが、

大学が定めている「卒業認定・学位授与の方針（ディプロマ・ポリシー）」および「教育課程編成・実施の方針（カリキュラム・ポリシー）」を知っていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。【大学独自設問】

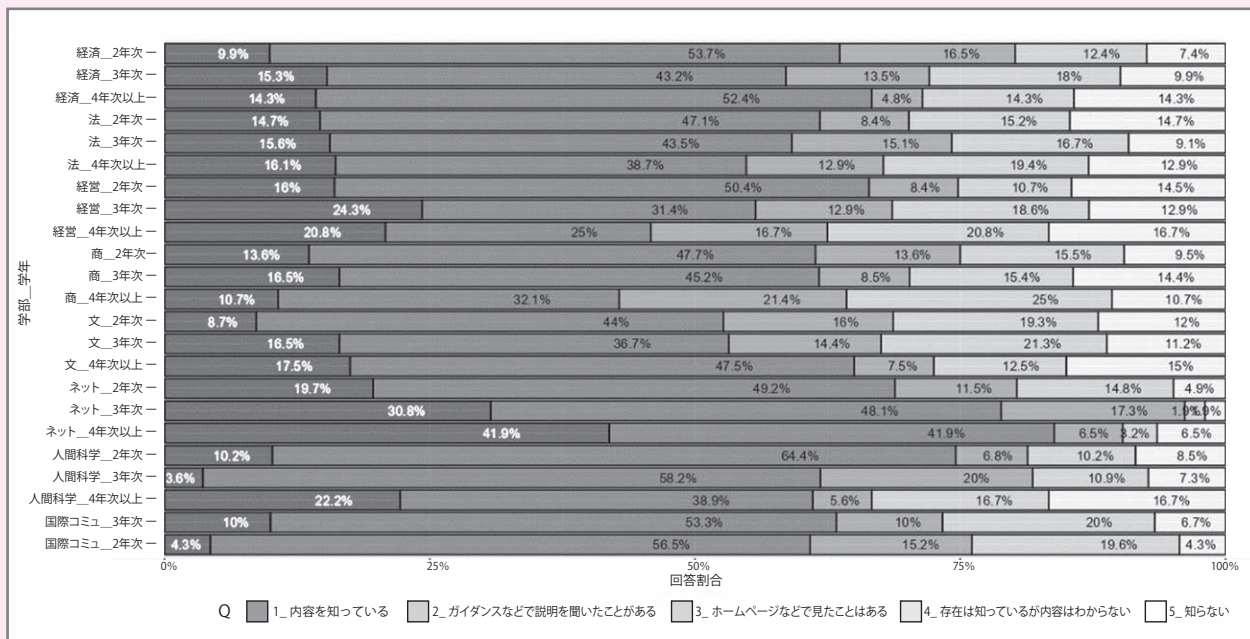


図1 DPの学生認知度

令和4年度 GPS-Academicの分析結果について

上げどまりの兆候が見られる。

(ii) 学修成果の自己評定

次に学修成果に関する自己評定に関して、専門的な知識・技能に関する自己評定、成長実感の

二つの項目を取り上げる。まず、専門的な知識・技能等を身につけた程度については、ほとんどの学部・学年で肯定回答の割合が50%を超えている。半数以上の学生が、本人の感覚としては、所属する学部・学科の専門的な知識や技能、思考方

大学におけるこれまでの学修を通して、所属する学部・学科の専門的な知識や技能、思考方法について、あなた自身どの程度身についたと感じていますか。最もあてはまるものを1つ選んでください。【大学独自設問】

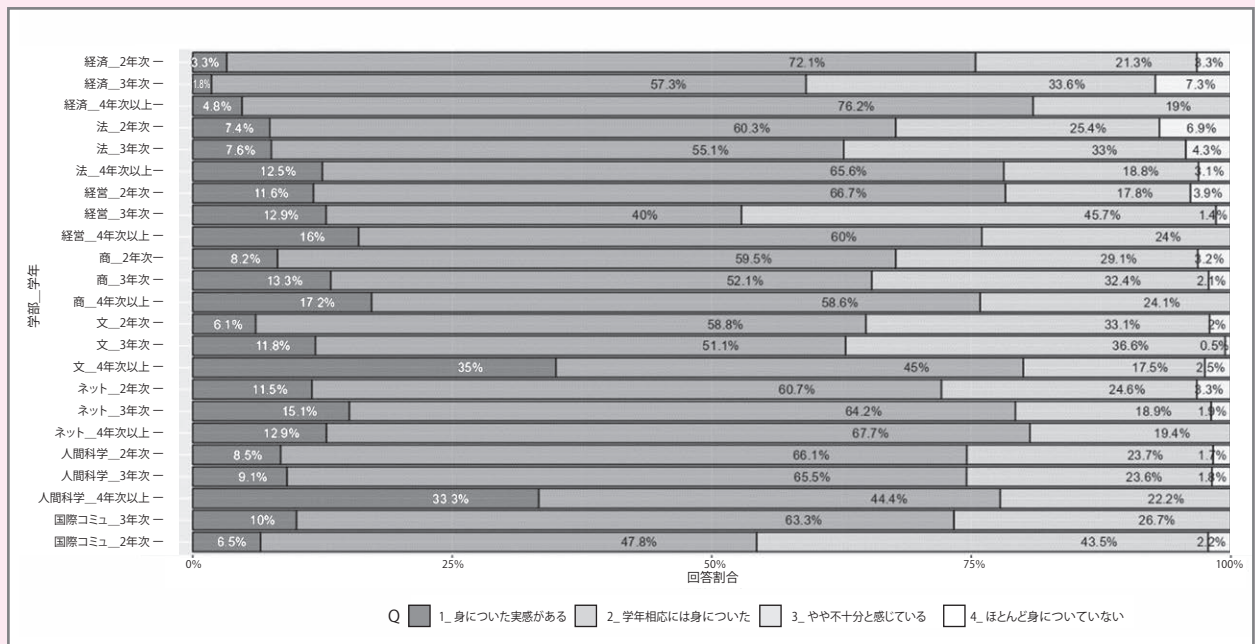


図2 専門的知識・技能、思考方法についての成長実感

成長実感 (GPS-Academic 共通設問)

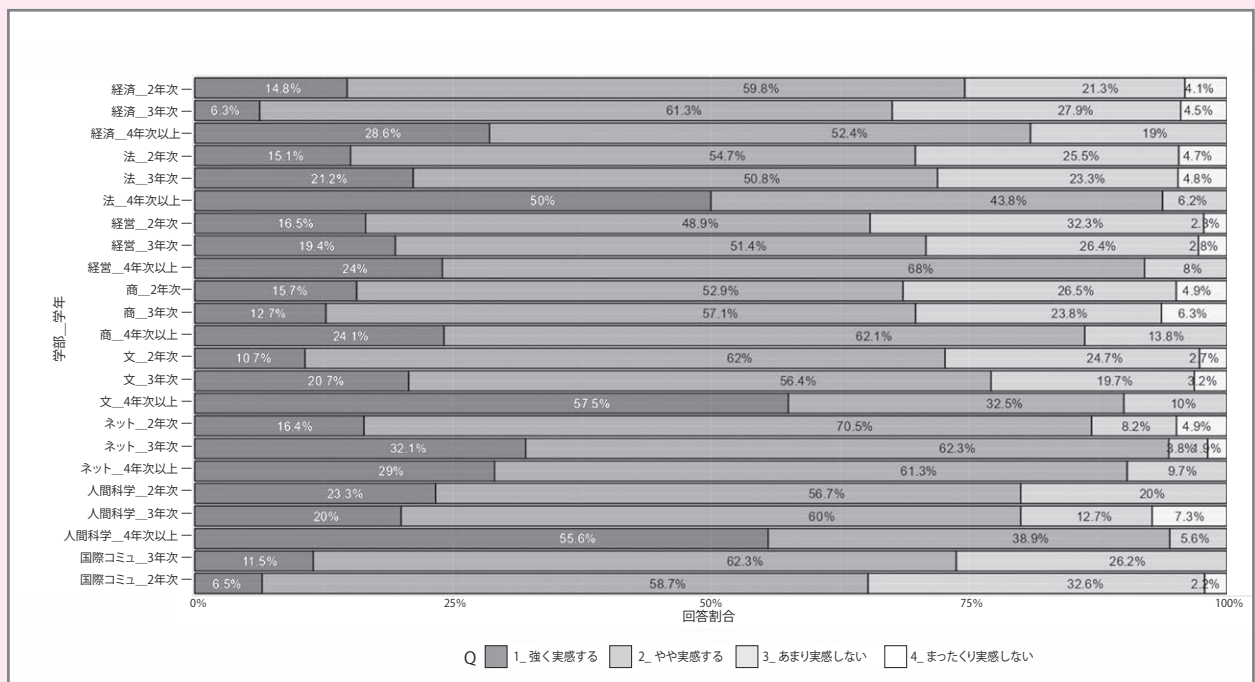


図3 成長実感【GPS-Academic共通設問】

法が、ある程度身につけているという実感を持っている。また、成長実感の項目では、専門的な知識・技能の回答状況と比べて肯定回答の割合が特に上級年次でやや多い傾向があり、専門的な知識・技能以外の領域での成長をより強く実感していることがわかる。反面、在学年数が長くなるほど学習効果や経験等が蓄積されてこれらの肯定的回答が増えることが予想されるにもかかわらず、高年次で肯定的回答が増えない、あるいは減少する結果が出ている部分については、その要因等について検討を要する。

## (2) パネルデータを用いた学修成果の検証

大学での学修行動がGPS-Academicのスコアにどのような変化をもたらすか検証するために、2021年度および2022年度にGPS-Academicを受検した3年次生のうち、2年次受検結果とパネルデータが作成できる学生を抽出し、データセットを作成した(図4)。その結果、2021年度3年次168名、2022年度3年次773名の合計941名のパネルデータが得られた。

作成したパネルデータは、①各年次の学修状況、②各年次のGPS-Academicの結果、③学部や性別などの属性を表す変数からなっており、詳細は以下の通りである。

### ①各学年での正課教育の変数

- 転換・導入科目の科目ナンバリング分野コードを用いて、その分野コードの単位を修得したかどうかのダミー変数
- キャリア (CRE)、ゼミナール (SEM)、情報学一般 (GIN)、自然科学一般 (NSC)、統計学 (STS)
- 1年次および2年次の年次 GPA

### ②受検者の属性を表現する不変変数

- 一般選抜入試ダミー、女性ダミー、学部ダミー、入学年度ダミー

### ③GPS-Academicの全国データから、従属変数と関連ありそうな変数

- 自習時間、読書、学習意欲、経験などを問う GPS-Academic に付属するアンケート結果

これらの変数を説明変数として、GPS-Academicの主要なスコアである「思考力総合スコア」を目的変数とし、パネルデータ分析を実施することにした。まず初めに、目的変数である思考力総合スコアの分布を以下に示す。なお、図中の斜線は $x = y$ の直線とデータの回帰直線である(図5)。

思考力総合スコアが2年次に高かった学生は3年次も高く、低かった学生は低いままであることが見て取れる。加えて、2年次のスコアが高かった学生は3年次にスコアが多少低下する傾向があり、2年次のスコアが低かった学生は3年次スコアが多少上昇する傾向もありそうである。

次に、これらの思考力総合スコアにどのような学修経験が影響しているのか検討するため、

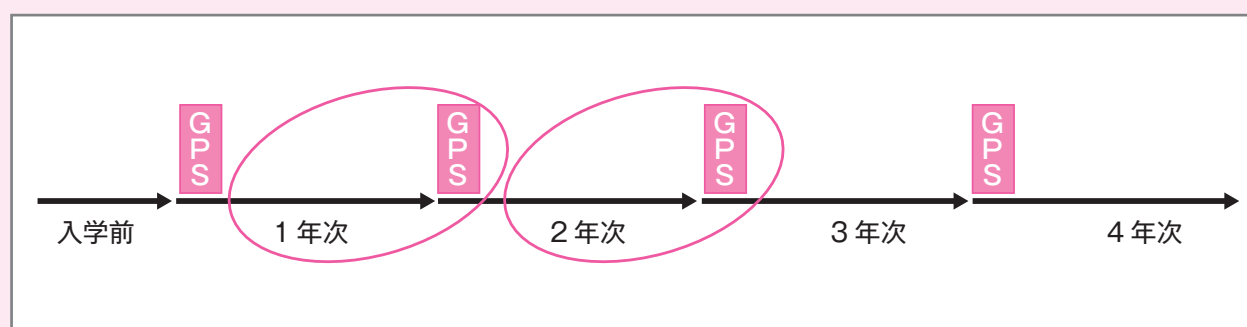


図4 パネルデータイメージ



上述の変数を説明変数としてパネルデータ分析を行った。パネルデータ分析の利点として、学生ごとの個人差の影響を取り除いた推定が可能となる点がある。これまでもGPS-Academicのスコアを用いて教育成果の検証を試みたが、単純な可視化や相関分析、重回帰分析などでは観測されない個人差などの影響が排除できず、結果の解釈が困難であった。

本稿では「①各学年での正課教育の変数」を説明変数に採用し、これらの変数が思考力総合スコアに影響しているという仮説をもとにパネルデータ分析による検証を試みた。パネルデータの一般的な分析手順である①プールド回帰モデル②固定効果モデル③ランダム効果モデルの3つを実施したのち、モデル間比較の検定を行った結果、②固定効果モデルが採択された。しかしその結果、思考力総合スコアに対して有意な変数は確認されず、この仮説を支持する結果は今回得ることができなかった。

紙面の都合上、ここでは詳細に検討するこ

とはできないが、可能性として今回採用した「①各学年での正課教育の変数」は特定分野の単位を1年間で修得したか否かというだけの情報であったため、授業の学修状況をより多くの情報量をもって表現できるようにしていくなどの、創意工夫を続けていくことが必要であると考えられる。また、思考力総合スコアは「DP3知識体系に基づく思考と知の創出」に対応すると考えられ、これらのDPに対応する授業は高学年において履修するカリキュラムとなっていることも一因と考えられる。高等教育における学修成果の検証は、先行的な知見に乏しく試行錯誤を繰り返すほかないが、専修大学においては今回使用したGPS-Academicや科目ナンバリングの他、今回検討に加えなかったカリキュラムマップなど、新たに使用できる教学データが増えてきている。今後はこれらのデータをうまく活用し、カリキュラム全体を捉えた教育成果を検証する方法論を確立していく必要がある。

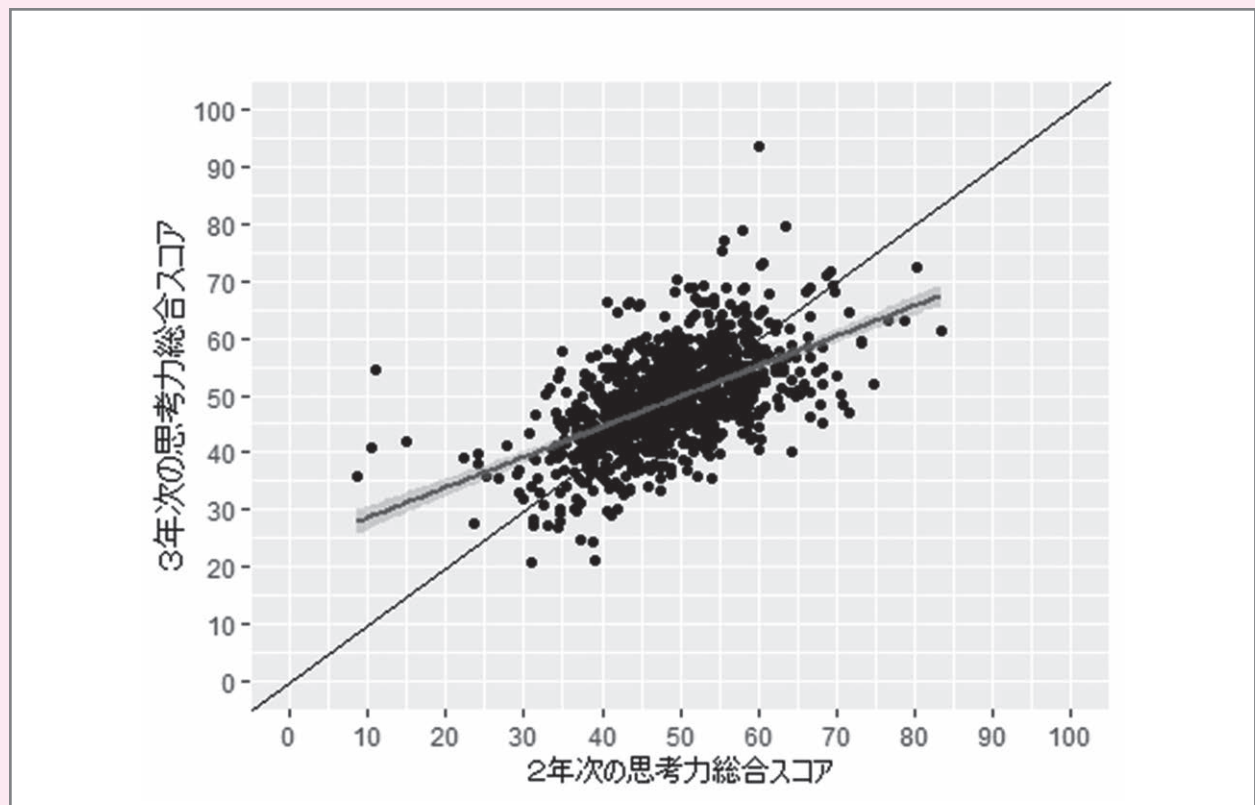


図5 思考力総合スコアパネルデータ比較

## 令和3年度

# 卒業生アンケートの結果について

教育開発支援委員会・教務課IR担当

## I 実施状況

卒業生アンケートは2021年度で7回目の実施となる。アンケートは、すべての学部・学科の卒業生を対象に、卒業式・学位記授与式の会場で行っている。7カ年の実施・回答状況は次のようになっている。

年度	卒業生数	有効回答数	有効回答率
2015年度	4,128	3,575	86.8%
2016年度	4,197	3,577	85.2%
2017年度	4,152	3,249	78.3%
2018年度	4,107	3,446	83.9%
2019年度	4,235	3,730	88.1%
2020年度	4,206	3,252	77.3%
2021年度	4,028	3,292	81.7%

## II アンケート結果の概要

### (1) 満足度について

本稿では卒業生アンケートで設定している設問項目の内、学生の満足度に関する設問項目に注目してその傾向を探ってみることとした。関連する設問は以下の8つである。それぞれについて(1)満足している、(2)ある程度満足している、(3)あまり満足していない、(4)満足していない、の4つから1つを選択して答えてもらった。

設問番号	設問
問1	授業(教養科目)について
問2	授業(外国語科目)について
問3	授業(専門科目)について
問4	授業(ゼミナールまたはプロジェクト)について

設問番号	設問
問5	国際交流・留学支援について(～2016年度)各種課外講座等(資格取得支援、各種試験対策等)について(2017年度～)
問6	課外活動全般(クラブ・サークル等)について
問7	就職支援について
問8	学生生活全般を振り返り、専修大学に在籍したことに満足していますか。

※ただし「国際交流・留学支援」については尋ねる項目は、2017年度卒業生からは「各種課外講座等」の満足度を問う設問へと変更されている。

回答内容を肯定的なもの、否定的なもの、参加・利用していない、の3つに整理して7年間の変化をグラフにすると次のようになる。

正課の授業に関する設問である問1～問4について、否定的な回答の割合が年々減少していることがわかる。特に外国語科目においてはこの7年間でおおきな改善傾向が確認できる。

また、正課外活動や就職支援、総合的な満足度を表す問5～問8についても、肯定回答の割合が大きく、学生生活全般について高い満足度を持って卒業していることが分かる。ここ数年間はCOVID-19の影響で、オンライン授業の実施やサークル・体育会活動の制限などがあったが、回答傾向や参加・利用していない学生の割合などに大きな変化はみられず、むしろ改善傾向が確認できる。これは、近年の学士課程改革や授業環境整備、学生生活活動支援などの施策が一定の成果をあげていると解釈してよいだろう。

令和3年度 卒業生アンケートの結果について

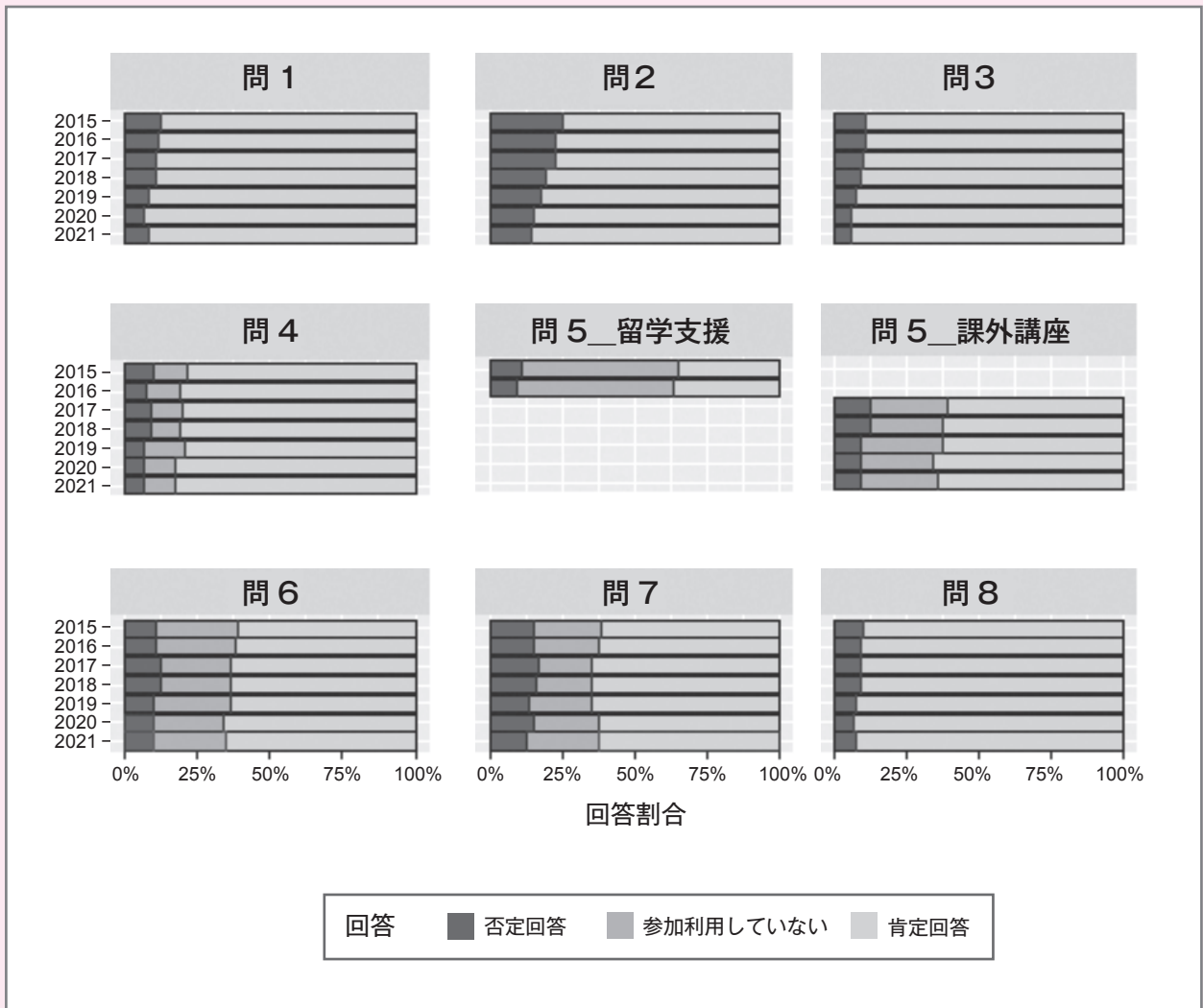
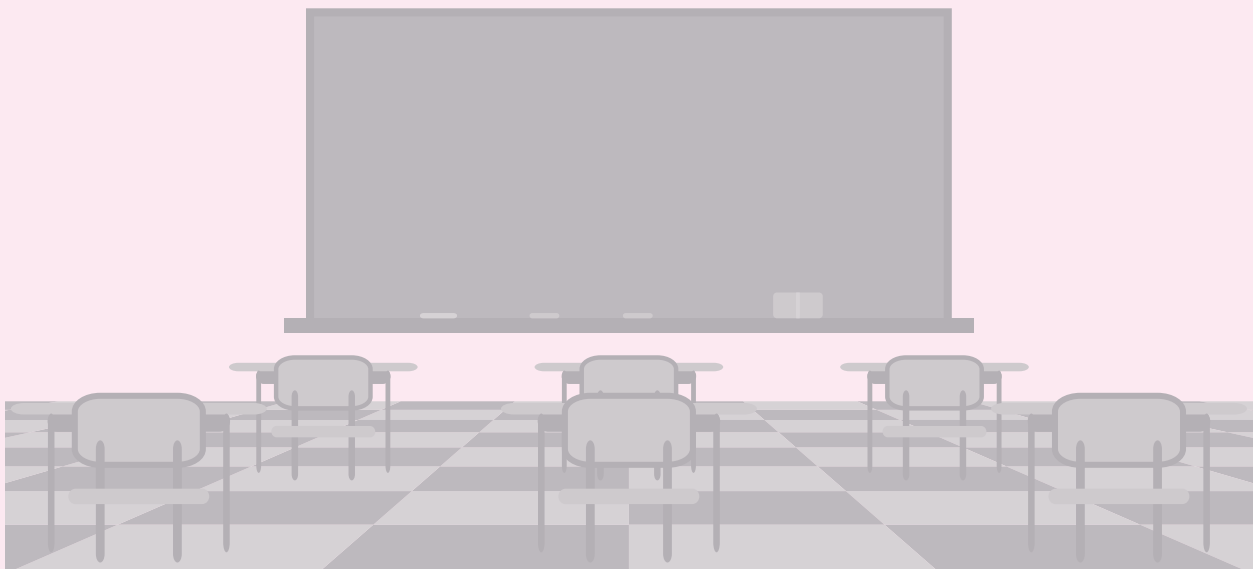


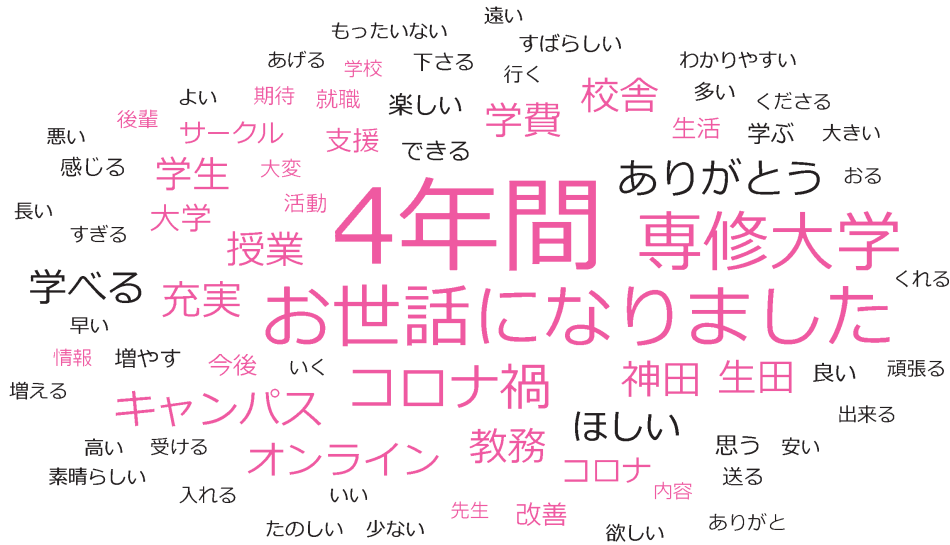
図6 卒業生アンケートの経年変化



(2)自由記述のテキスト分析

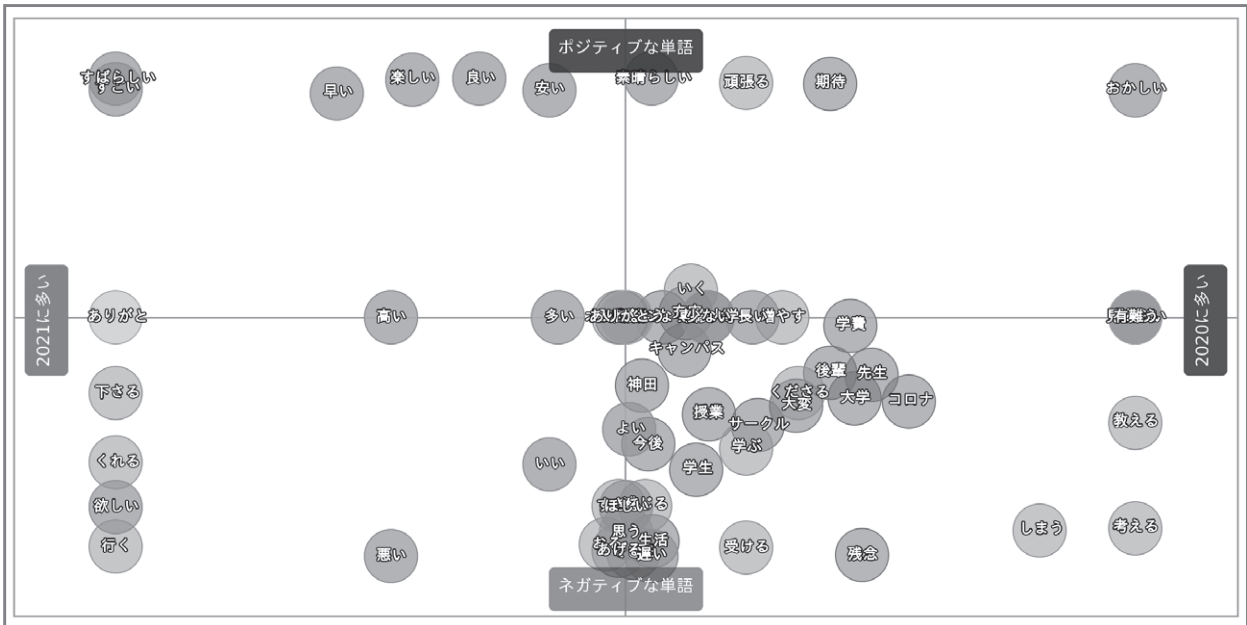
次に、自由記述欄の傾向を知るために、記入された言葉をテキストデータにして分析し

た。データにしたものから名詞のみを抽出して出現頻度をカウントし、wordcloudを用いて可視化したのが次の図である。



wordcloud上ではあまり変化がわからないが、下図のように昨年度の自由記述回答と比較をすると、「コロナ」や「学費」などの単語の出現頻度が減少しているようである。こ

の影響もあり、今年度の自由記述回答は昨年度よりもネガティブ単語が減少していると考えられる。



※ユーザーローカル テキストマイニングツール ( <https://textmining.userlocal.jp/> ) による分析

卒業生アンケート各設問の集計結果は、教職員用コミュニケーションツールMicrosoft Teams内の「専修大学ライブラリ」に掲載しています。ぜひご覧ください。

**教育開発支援 NEWSLETTER**  
 専修大学教育開発支援委員会広報誌 第45号 (Vol.23 No.1)  
 発行日 令和4年11月30日  
 発行者 専修大学教育開発支援委員会  
 〒214-8580 神奈川県川崎市多摩区東三田2-1-1  
 TEL.044-900-7857 FAX.044-900-7856  
 E-mail fd@acc.senshu-u.ac.jp  
 編集協力 (株) 芳文社